

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者 大西 浩

池田工業高等学校

ヤスィックアケルの奮い空 5 キャラバン・・・砂塵との戦い

朝食を済ませ、いよいよキャラバンへと出発する。ジープ3台にトラックが1台。今日はカルギリクまでのおよそ250kmの車の旅。出発して暫く進み、ナイフの街インギサーの手前で南西の彼方にコングール峰(7649m)が見えてきた。この道はこれまで4回通ったことがあるが、いつも天気が悪かったのだろうか、初めて気づいた。沙漠の彼方の遙かな山。我々の目指す山も笑顔で迎えてくれるだろうか？

14:30にヤルカンド(沙車)に到着。故郷料理と銘打ってある食堂で昼食を摂った。ヤルカンドからカルギリク(叶城)にかけては鳩料理が有名だ。鳩のカバブ、鳩とホウレン草のラグ面、鳩のローストと鳩づくし。どれも味付けはあっさりしていて美味しかった。ここからさらに沙漠を1時間半、日はまだ高く気温もあがったためか、至るところで竜巻が起こっている。昨日の事件の余波だろうか、何方所か公安検査が行なわれていて、ホータン方面から来る車がチェックを受けていたのは、気になった。16:50にカルギリクのホテルに到着。

7月21日、いよいよ入山である。その興奮からか、なかなか寝付けなかった。一晩中寝たり起きたりしながら、朝を待った。我ながら、まるで遠足の前日の小学生のようだと思うが、ここまでが長かっただけにやはりそれだけ嬉しく、気持ちが高ぶっているのだろう。9:00にホテルを出発し、いよいよ新蔵公路に入る。この道路をこれから500km強進んでBCに入るのだ。暫くは新しくできた快適な道を進む。これはいいぞと思ったのもつかの間、ものの15分も進まないところで補修工事の現場へ入った。

実は今年の4月になって、ヌルさんから届いた一通のメールは、登山隊には衝撃だった。それには、この新蔵公路が今年の4月から2013年の11月まで3年間工事のため全線600kmにわたり全面通行止めになるということが書かれていた。ただし、毎月1日、11日、21日の朝9時から許可車に限り通行を認め、往復の日数も考えそれぞれ3日間に限っては通行できるという措置がとられるということである。このことは、ヌルさんにとっても寝耳に水の話だったようだ。我々の登山計画は、その時点ではほぼ確定し先発隊と本隊を分けて2隊で入山し、先発が先駆けて去年できなかったBC、ABC偵察をして、本隊を迎え入れるという形を考えていたため、根本から見直さざるを得ないことになった。結果、検討し直した計画は、全隊が7月21日同時に新蔵公路に入り、22日にBC入り、それから登山活動を開始して21日間で登山を展開、迎えの車には8月11日に新蔵公路に入ってもらい12日にはすべての登山活動を終了して撤収、13日にはカルギリクに戻るというものである。予定変更の余地の一切ないタイトな計画である。高所への順応、昨年への偵察がうまくいっていなかったことなどを考えたときに、非常に不安が高まる計画の変更であった。そして、今日が我々の入域許可日の7月21日なのである。

しかし、新蔵公路全行程600kmを3年かけて一度に工事をするとは一体どういうことなのだろう。まあ、去年通れなかった土砂崩れ箇所を補修をするのだろうが、それに3年もかけるのか。また全線通行止めをする意味は何処にあるのだろう。・・・と、日本に

いるときは全くイメージができず、「中国という国はなんという横暴な国だろう。どうせ工事区間などわずかなものだろうから、その区間だけを区切って片側通行にするとかそういう工事はできないものか」と、他所の国のことながら出発前には腹が立ったものである。ところが、実際に新蔵公路にはいって驚いた。この工事は、掛け値なしに路線全部に及ぶ大工事で、今までの道とは別の全く新しい道を作る工事だということがわかってきた。とにかく膨大な数の人間と膨大な量の重機を投入し、まさに全線の至るところで工事をしているのである。なぜ急にこんなことをしたのかと言えば、最近の中印関係が影響しているのだと言うことが推測される。ぼくらの入る地域は中国とインドの間で一部国境未確定の部分もあり（もちろん道路の通っている部分については中国側は自国の領土と主張しているが）、2005年以来の関係悪化で、中国としては新たな道を通すことで既成事実を積み重ね、実効支配ができると考えてこの大工事を急にはじめたというのが真相のようだ。この道路は、表向きは農作物の取れないチベット阿里地区への物資供給ルートということだが、それ以上にインドに対するデモンストレーションのための軍事道路という側面が強いのだ。実際、外国人未解放のこの地区へ入るのは極めて手続きが困難で、自治区の政府の入域許可、新疆登山協会の登山許可の他に、解放軍の許可がなければ絶対に入れないのである。そして実際に入るにあたっては、カルギリクから150kmほど進んだクディ（庫地）というキルギス人の居住区のある村に造られた軍の駐屯地で一人一人入念にチェックをされ、その先にある三十里宮房と大紅柳灘という二カ所の大きな駐屯地では、写真はおろか車を停めることすら許されないという条件がつけられている。



さて、その庫地（クディ）は、標高が2500m。そこに至るにはアカズ峠という3400mの峠を越える。この先は、ほとんど人が住んでいない地域となる。ここからは、一気に高度をあげて4990mのセラック峠を越える。我々は、高所順応を考慮して、この峠の手前で車から下ろしてもらいおよそ高度差300mほどを歩いて峠を越えた。この辺りは比較的植物も豊かで、日本のウルップ草に似た花や豆科の植物が迎えてくれた。初めて越える5000mの高さに山内君が苦戦していた。昨日から体調を崩していることも影響しているのだろう、ペースは上がらず、途中で吐いてしまった。ちょっと心配である。峠を登り切ると、何とこの4990mの峠の上に道路工事の宿舎となるテントが張られており、老若男女数人が働いている。恐るべし、中国の道路造りである。

編集子のひとりごと

「登山隊」の写真展が9月21日から30日（24、25日は休み）まで、信濃毎日新聞安曇野支局ギャラリーにて開催されています。登山隊の軌跡はもちろん、それ以外にもシルクロードの写真などが展示されています。入場は無料です。お近くの方は、ぜひお出かけ下さい。なお、この写真展は今後県下各地を巡回する予定ですが、希望があれば貸し出しも致します。学校のイベントなど遠慮なくお申し出ください。（大西 記）